

ロシア語テキストに現れるアスペクトの実例と その機能分析（試論）

榎 尾 頌 子

Aspects Examples in Russian Texts and Their Functional Analysis (Tentative Assumption)

Syoko KASHIO

Summary

This article indicates awareness of the fact that aspect tenses in a text may hold some particular functions that haven't been fully discussed so far in the existing basic functional analysis. I hold the view that in analyzing these particular functions properly, a mere serial of sentences as a subject is not sufficient. It will be quite effective to examine a whole text with all combinations/arrangements of aspect tense patterns in it and see what effects they produce in their arrangement when placed in "the beginning, the middle and the end" of a text. I have already tried an analysis on this before (Kashio 1998/2000) pointing out that aspect tenses have functions to arrange "topics" in a perspective view (foregrounding/putting it background), to indicate indifference/strong connection to present, to show a sequence in events and do its sectional tying up of events (solidification). Yet, these text functions are only basic ones. Although this paper continuously deals with functions, I tried to take a wider view of whole text. Unlike generally existing "basic functional analyses with a serial of sentences as a subject," this analysis takes a whole text as a subject. It is most useful to examine how writers consciously or not arrange/ use combinations of aspect tense patterns in order for readers to comprehend a message "writer's view/explanation/interpretation" from "topic presentation" of a text. In such cases, conventional aspect tense functional analyses do not explain all aspect tenses arranged in a whole structure of a text. It rather relies on the help of syntactics. In this article I extended the subject of analysis to "a theory of control in paragraphs" 「段の統括理論」 referred in syntactics by Sakuma Mayumi (1995/2000 and so on) to see if this

theory is applicable. I believe I did get some result out of it, little as it may. Unfortunately, I couldn't go beyond completing a transitional analysis/ tentative assumption, this time again.

Whether it is a novel, an essay or a document, writers of Russian texts must select aspect tense patterns (verb past perfect, past incomplete, present incomplete, etc) in their each sentence. Aspect tense becomes to a trivial element when it comes to grasping an idee or contents of a text. It is because aspect tenses are just one of the methods employed to describe clearly the contents of a text from many different viewpoints. Their main purpose is to supply various styles in description, and keep only a distant relationship to the contents of the text itself. To choose aspect tense patterns is one of the techniques of describing things.

Still, it appears that to some extent, the combination/arrangement of aspect tense patterns plays a role of functions such as uniting (summing up/tying) a serial of sentences, or describing writer's views/interpretation. The types of texts vary as -

- 1) shows clearly that writers are handling their heroes/heroines, other people and events in their book looking down from high above with bird's-eye view
- 2) above operations are implicit and not clearly indicted,
- 3) a middle course between 1) and 2).

Each type involves "topic presentation", and for this "topic presentation", there are two ways to express "writer's view/explanation/interpretation". One is explicit, and the other is implicit. Aspect tenses play a certain role in drawing readers to the end without losing their interests and expressing writers' messages effectively. Writers try their best not only to lead readers through the work but also to convince and move them by what writers aim to indicate as message - "writer's view/ explanation/ interpretation", employing functions of "topic presentation" that a text holds. In this phase writers must face with the effective selection of aspect tense patterns. Yet, this selection is not always purposefully done. There will be cases included in which writers select patterns automatically when they write in their mother tongue, and choices were effective as a result. It will be difficult to do such kind of research single-handedly for any individual researcher. Collaboration or inter-criticism is strongly desired.

はじめに

ロシア語テキスト作者は、各文においてアスペクトの形態（動詞完了体過去、不完了体過去、不完了体現在、辞書形など）をさまざまに選択する。アスペクトはテキストの内容、理念や題材を知ること

が目的の場合は、瑣末な要素である。なぜなら、アスペクトはテキスト内容を、視点を変えて浮き彫りにする一種の技法にしか過ぎず、その述べ方に变化を与えることが本領で、一般的にはテキスト内容それ自体には間接的に関わるだけである。

テキストは一般的にはじめ（冒頭部）・なか（展開部）・おわり（結尾部）という構造をもち、「話題」を展開しながら作者の「視点・見解・解説」を各部分に（顕在的・潜在的に）に織り込む。作者が最も主張したいことを上記構造のどこかに盛り込む（例えば、はじめにある場合は頭括式、おわりにある場合は尾括式—佐久間1999）こともあり、それらが顕在的には明確に出現していないテキストもある。

小論は、テキストにおけるアスペクト・テンスには、連文サイズの基本的文法機能^{注1}のレベルに加えてテキスト特有の機能があるのではないかと、という問題意識をもつ。作中人物・出来事があって、それを見ている作者がいる。前者のテキスト、つまり、作者の主張・テキストの主題が顕在的に出現しているテキストを中心にとりあげ、作者の「視点・見解・解説」とアスペクト（テンスを含む）の関係、作者が最も主張したいこととアスペクト・テンス形態を、現象として見ていく。これは、あるアスペクト・テンス形態は常に作者の「視点・見解・解説」機能、作者の主張・テキストの主題を表すときに使われることでなく、アスペクト・テンス形態それ自体が作者の視点や解説機能や作者の主張を表現する機能を持つというのでもない。小論の結論は、アスペクトのテキスト機能は、アスペクト・テンス形態それ自体ではなく、アスペクト・テンス形態の配列・組み合わせ・相関関係によって生じる、という仮説である。アスペクト・テンスのテキスト機能はまだその全体像が未解決の問題であると思われる。従って、小論も仮説の域を出ない。

なお、作者による「話題の解説」は、「話題」をとりまとめる機能になることも多い。この機能とアスペクト・テンスについても見ていく。

作者のアスペクト形態のさまざまな選択は恣意的ではなく、一定の客観的・基本的文法機能にのっとっている。ただし、ロシア語母語話者（作者）によるアスペクト形態選択は常に意図的とは限らない。結果としての母語アスペクトの効果・機能についても、作者が無意識の場合も多くあると考えられる^{注2}。従って、アスペクトは作者の意図を超えて効果・機能を発揮している場合もある。一方、ロシア語母語話者が無意識、意識的に選択しているアスペクト形態の配列の相関関係で生じた一定の効果・機能を、外国人は意識化しなければならないケースも少なくない^{注3}。

・アスペクト・テンス形態と作者の視点・解説との関係

1．なぜアスペクト・テンスのテキスト機能が必要か

なぜテキストにおける作者による視点・解説・評価に注目するのか。テキストは種々の出来事、作中人物の吐くさまざまな意見や意図、愛憎、空間、過去・現在・未来というレベルの異なる時間などの無数の集積である。それらが全体として私たちの前に投げ出されている。しかし、私たちが

文学を含むテキストに接した後で、ばらばらの印象ではない、一定の有機的つながりや平板ではない奥行きを感じとることができる。時には、文学などから感動さえ得ることもある。雑多な題材がばらばらにならずにいるのは、作者がそのテキスト全体を鳥瞰して、何らかの視点・評価・解釈・解説などがテキストに現象として出来している（作者が常に意識しているとは限らないが）からではないか（本稿では作者の視点・評価・解説を作中人物に託している潜在的なテキストや、作者と作中人物が対等に対話しているとされるテキスト^{注4}は紙幅の関係から除く）。それを理解する手段は複数あるが、アスペクト・テンスもその手段のひとつである。樫尾（2000）において、アスペクト・テンスが「形容詞や名詞などの叙述表現と異なり、状態の発生・継続・完了、結果継続、出来事間の前後関係、因果関係/接続機能/前提/背景/新たな出来事の焦点化/視点移動/視点の重層化/場面交替/テキストの部分的統括などの機能を担っている」を見たが、本稿では、これぞ作者の視点・解説機能でありアスペクト・テンスと一定の関係性をもつ実例、および、連文を「統括」（佐久間1995）している現象を扱い、その意味を考える。樫尾（1998・2000・2003）で試みた下記方法論を原則として継続する。

2. 分析の方法論

- a. 「作者の視点・解説・解釈機能」という観点を、アスペクト基本文法機能に追加し、「アスペクトのテキスト機能」の一部とする。
- b. 連文や段落を取りまとめる機能として、佐久間まゆみの「段の統括機能論^{注5}」（佐久間1987 b・1995・1999・2000・2003；樫尾1998・2000・2003）を応用する。作中人物の意見か、作者の意見・視点・解説機能か、境界線を引く手段として、佐久間の、「段の統括機能論」を基にアスペクト・テンスの配列・組み合わせの意味を問う。テキスト作者が具体例を連文で集積した後、作者の視点・解説・主観的意見を出すことで、その段が統括される、という現象を本稿で取り扱う。
- c. テンスは、発話時を基点とする談話なら、それより前・同時・後で過去・現在・未来が原則であるが、テキスト機能から見ると、テキスト基本時間点を基点とした視点移動機能を担うことが多い、とする樫尾（2000）の仮説を、継続して試みる。例えば、資料の Последний год Достоевского （ドストエフスキーの最晩年）の基本テンスは、現在形である（資料1）。Он об этом не знал彼（ドストエフスキー）は（当時、そのことを）知ってはいなかった。Но мы-то знаемしかし我々（現代人）のほうは、知っているのだ。（p.581）（我々のмыについている-тоは強調を示す）。これを基点にして、叙述の平板化をふせぐため、また、作者自身の見解・解説機能、文脈展開機能、連文の統括（まとめ）機能を有効に果たすために、アスペクト・テンス形態を複雑に出現させている。作中人物や出来事だけで構成している（例：TVCM^{注6}）、あるいは、それを見ている作者が顕在化しているテキストもある。この二種の境界線は容易には立て難いが、ここでは、読み手が作者視点を客観的に認識できる場合を扱う。こうしたアスペクト・テンス現象はアスペクト基本機能だけでは説明しにくい（後述）。

．アスペクト・テンス現象が作者の視点・解説機能にどのように現れているか

Последний год Достоевского^{注7} の基本テンスは、現在形（既述）である。ドストエフスキーの生命が残された時間に関して、ドストエフスキー自身の認識は… Все только еще начинается .であり、迫っている死を知らない。作者はドストエフスキーの死期をこの時点ですでに知っている。作者の視点を、ア．不完了体過去の解説機能で統括し、イ．不完了体現在形である。テンス形態は異なるが、連文を作者の視点・解説機能で統括する、という点では同一である。従って、作者による視点・解説機能は、テキストの基本の時点が現在であろうと、アスペクト現象は、不完了体過去形、現在形いずれもあることになる（完了体現象は - 2 - 2 - 2参照）。

ア．Ему оставалось жить чуть больше месяца (p.6) 資料2

彼＝ドストエフスキーに残された人生は一ヶ月あまりしかなかった；不完了体過去
оставалосьは先行連文の出来事に対する作者の解説機能であり、同時に、先行連文を統括している。
（榎尾2003）。

イ．Ему остается жить сутки (p.518) 資料2

彼＝ドストエフスキーに残された生は一日である；不完了体現在形 остаетсяは、作者の視点
解説機能であり、同時に、先行連文を統括している。

ア、イは、同時に、段を統括する中心文であると思われる（後述）。

—Завтра Ф.М. лежал уже на столе(ボールギンp.522 資料3) は、ドストエフスキーの死を報じる当時のニュース記事であり、Завтра лежалは「作者ボールギンの解説機能」である。テキスト作中人物にとっての“未来” завтра - ему будет—を作者ボールギンの今の視点から過去の事実として見ている。

Дама с собачкой（チェーホフ）恋愛小説の中で作者自身の自然観を挿入している。この「段」は、読み手が、作者の声として認識できる。この「段」は、日本人の無常観に通じる。自然の恒久性の描写の「段」A（資料4）と後半の「段」Bの恋、人の命などの移ろいやすいものとの対比がある。段Bは、主人公が女性の肩を抱いて「やがて彼女も老いていくだろう」という主人公の視点として書かれている（「段」Bは主人公の思いとして書かれているが、潜在的ながら作者の人生観・恋愛観を感じとることができる）。一方、段Aは男性主人公の単一視点を全く離れ、作家が鳥瞰している。男性主人公の考え方として提示しているというよりも、作者の自然観・人生観・無常観として機能している^{注8}。アスペクト配列は、恒久性を表す「段」Aでは不完了体連続 шумело, шумит, будет шуметь、である。テキストの冗長性を嫌い短編名手であったチェーホフだけに不完了体の全テンス（過去・現在・未来）の集中総動員は作者の自然観・宇宙観の強

調・信念さえ感じられる。Сидя ~ небоまでがつなぎとなって、作中人物の心理へと無理なく移行している。男性主人公の単一視点だけで、妻や子供・不倫相手の女性・その女性の夫などの視点が一切欠如という背景の中でこの段の挿入は、作者の視点・見解を顕在化させている。「段」Bに完了未来形で変化の必然性が使われている。

・連文を束ねる、とりまとめる（＝統括）機能（佐久間2003他、樫尾2000・2003）

作者の「視点・見解・解説」は「話題をまとめる・統括（佐久間1995）」機能をもつことが少なくない。「話題」をまとめる機能をもつのは、「段」（佐久間まゆみ1995他多数）という単位である。樫尾（2000）でも触れたように、佐久間（1995）が規定した原理—文章には「同一の話題を表す文集合」が存在し、それを「くくりまとめる力」（統括力）をもつ中心文があることが多く、それが「段」を作る。中心文が「文脈展開機能を実現し、他の段の中心文との間に、より高次元の新たな統括関係を形成し、より規模の大きい話題を表す連段のまとまりを成立させる」（佐久間1995p.106）—は、ロシア語テキストに接する場合にも一定の有効性をもつのではないだろうか。樫尾の過渡的分析（1998・2000・2003）ではあるが、一定の分析結果—ロシア語テキストの構造分析にも有効—が出たと思われる。前回につづき各部分の「話題」をとりまとめる「段」、および、作者がもっとも言いたいことによってテキスト全体を統括する大「段」とアスペクト・テンスの現れ方の関係を見ていく。

1. テキストの統括例

.. все равно такое молчание выглядит странным(ボールギンP.555資料5)(いずれにせよ、こうした沈黙は奇妙に見える)。выглядитは、不完了体現在形の基本機能から言えば、現在の具体的な状態、または、一般的な状態を表す機能と説明されるが、それだけではこのテキストにおけるвыглядитの機能を語ることはできない。「テキストにおけるアスペクト機能」の立場から分析するなら、「作者（ボールギン）の明確な意見・解説・解釈機能」である。この文の前に37段落（全6頁半）p.550 Теперь зададимся ~ p.555 сделанные цензурой が継続して、молчаниеの具体的な内容が詳細に述べられている。そのмолчаниеの具体的な内容のあとに、上記の一文が挿入されている。その間に新しい「節」「Рассказ о вселении господина Алафузова в Новую квартиру」があるが、そこも結束しながら同一話題 молчаниеがずっと継続している。これは、佐久間（1995）の規定する「段」と考えられる。

A部分＝提題表現（テーマ）：молчаниеの具体例の列举。不完了、完了体の現在／過去が混在（p.550～p.555）

B部分＝叙述表現（レーマ）＝統括機能をもつ→A部分に対する作者の解釈・評価：такое молчание
выглядит странным 不完了体現在形（p.555）

B部分の такое（このような）は、指示・照応表現で、A部分の具体例をB部分に引き込んでいく（佐久間2002）。BはAを内部に取り込むことにより、Aを相対化させ、AをBの叙述表現に対する提題表現化させる。つまり、p550の数段落—A部分—は、p555の上記文—B部分—と直接の対応関係にある。A部分は、佐久間が規定する「段」における「提題表現」機能、B部分は「叙述表現」機能を持つ。A部分の不完了現在形は歴史的事実であり、事実上は過去のできごとである。B部分の不完了現在形は作者の“テキスト上の今・テキスト作者の今”と同じ時間を示す。

- で触れたが、А . Ему оставалось жить чуть больше месяца(р6) \ И . Ему остается жить сутки.(p.518資料2) は、作者の視点・解説機能であると同時に、段を統括する中心文である。Аは В один из ~ еще начинаетсяまで8文を、Иは На следующее утро ~ Я еще вас переживуまで27文をそれぞれ統括している、と考えられる（- 2-2-1にも、パターンのひとつとして触れている）。この機能は、段における、作者による一種の部分的“まとめ”になっている。作者の視点・解説の「部分的統括」（佐久間2000）に注目することで、記述内容が有機的につながる。佐久間（2000他）では、「段」における統括は、要約力をつける際の必須成分を含むとしている。テキスト内の必須情報単位（佐久間2000）をキャッチできることは要約の力につながる^{注9}。アスペクト・テンスのテキスト機能分析には「要約論」も関係する。テキストのアスペクト・テンス形態をそのテキスト要約用にそのまま抜粋することではない。作者が受け手を導こうとするアスペクト・テンス技法の中に作者が伝えたい必須情報・モダリティ（テキスト作者が無意識の場合があっても、実際はモダリティが強く働くこともある—榎尾2003）を認識することが可能なのである。

作者の解説機能のアスペクト形態として、同じ動詞（оставаться）が不完了体過去形も不完了体現在形も出現していることになる。文間文脈と「段」から客観的に読み手に「作者の視点解説機能」として理解される。пишетも不完了現在の歴史的現在形による作者の視点機能である。新事態発生が完了体 появилосьで、後続の不完了過去の否定形は先行文の理由付けである。詳細が動作順次性（完了体）になっている。話題全体を、不完了体現在形による作者の視点で統括している。

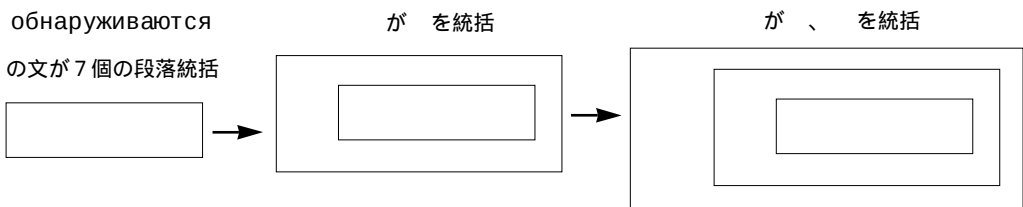
（ポールギンP.634 資料6 不完了体現在の歴史的現在 обнаруживаютсяを含む文 К 1881 году.... は最晩年のドストエフスキーの内奥と時代情況の関係が「話題」である。この話題は本全体のテーマではあるが、P.634では具体例ではなく、抽象性の高いまとめ表現が多くなっている。後続連段落（7個）（Достевский умерの前まで）統括機能をもつと同時に作者の解説機能も兼ね、段形成している。これが、この段の第一次統括である。段末 Таков был многосоставный спектр 1881 годаが第二次統括で、抽象的、作者のまとめ表現が投入されている。Это была мертвая точка векаがこの段の最終的統括をし、一次、二次よりさらに抽象概念で統括し、作者の主観的解説機能の顕在化がある。段頭を不完了現在（歴史的現在）とし、段末を不完了過去という対応

により、過去形は作者の今→当時を過去におく・遠近の遠へ視点移動し、作者の今→読み手の今が前景化する。

後続 p.636 資料7— секрет Достоевского и заключался , не рекомендовал , ... начал , говорил , полагал , намекал , призывал , указывал , служила において作者が、ドストエフスキーの最晩年の人生を不完了体過去の連続によってすべて現代から過去を見ている。この が、 を統括している。その結果、 の相対化が起こり、テーマ性化 = 提題表現化している。

がレーマ化 = 叙述表現化する結果、 は より統括力が相対的に大きくなる。この は、 との相関関係で相対化しテーマ性化 = 提題表現化し、 がレーマ化 = 叙述表現化して最大の統括力によって全体統括する（メッセージ性の統括力の強さについては佐久間1995他多数・櫻尾2000 - ）。

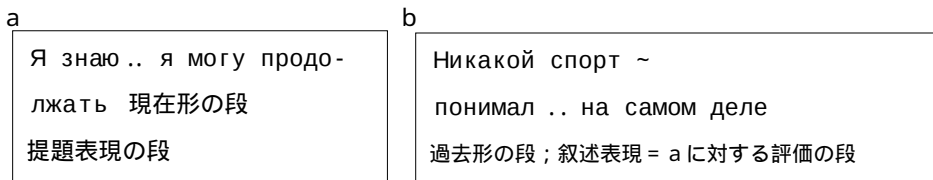
Он умер, Россия стояла, Будущее было. Он умер, получили... они стали (p.643 資料8) の段が最大の統括力を持つと考えられる（参照 - 2 - 2 - 2 ）。



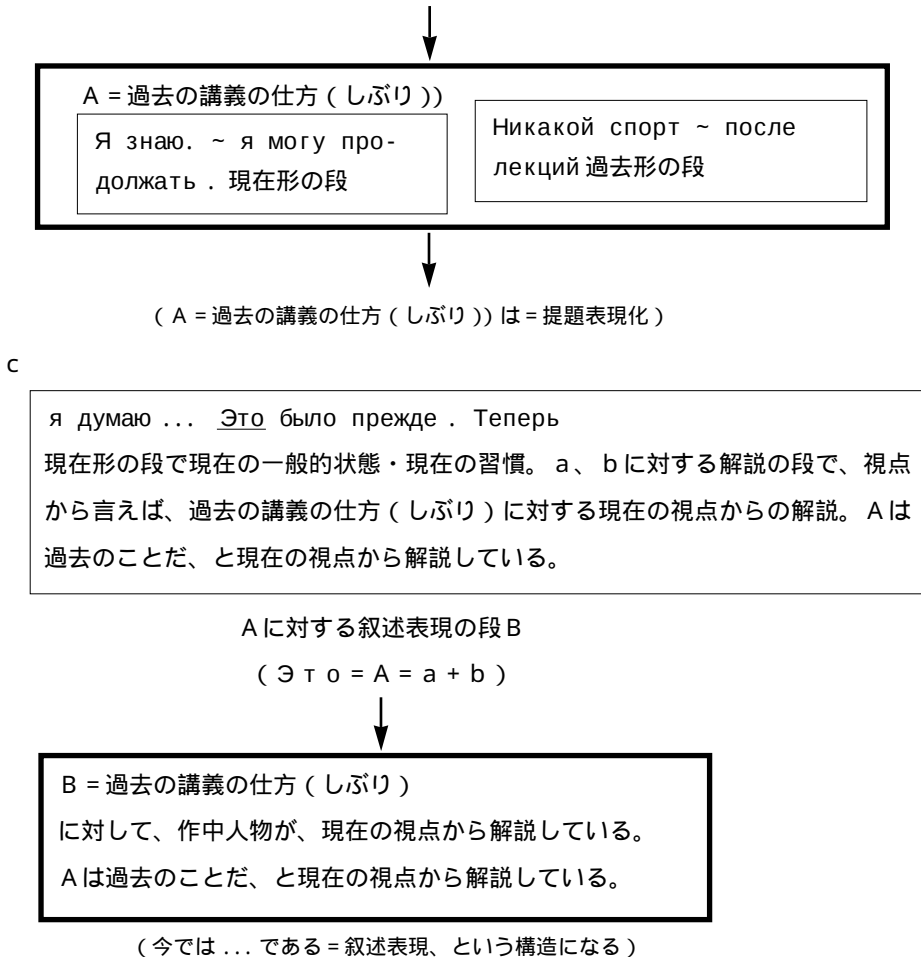
（統括構造図の理念は佐久間（1997）を参考にした。佐久間は節を基礎単位としているので、もっと構造図は緻密である）

『退屈な話』（チェーホフ作：資料9）— テンス・アスペクトの日口対照と統括関係

絶妙なテンス・アスペクトの視点移動技法、部分統括現象が見られる（作者が無意識であるとしても）。



a だけなら、作中人物が、現在の視点から現在の講義を見ていることになるが、b でこうした講義はどんなスポーツよりも満足感をもたらしたと、作中人物が、過去の視点から自分の講義を振り返っている。従って、a は b との組み合わせ・配列により、a + b で、さらにサイズの大きいひとつの段 A になり、機能としては過去の講義の仕方（しづり）を示す提題表現の段 A になる。



清水（2004）は、チャーホフの「退屈な話」を翻訳で読んだ結果として、次のように指摘している。「（略）それにしても、先に彼は「総入れ歯」で「頭と手は衰弱のためにぶるぶるとふるえ」と書いてあったはずである。そんな老教授にこんな情熱的な講義がはたして可能なのであろうか。と思っていたら、何とこういった熱い講義をしていたのは昔のことであつたことわっている。いつの間にか叙述が 現在 から 過去 へと滑り込んでいたらしい（いや確かに先に『講義のしぶりはあい変わらず堂に言ったもので、昔と同様に二時間ぶつ通して聞き手の注意を引きつけることができる』と書いており、叙述に混乱が見られることは指摘しておかなければなるまい）」という指摘がある。チャーホフの叙述に混乱が見られるというより、むしろ原文（資料9）では、ロシア語テンス・アスペクトによる巧みな時間処理がなされている。上記の「段統括」で考えると解決できるものと思われる（これは日本語翻訳では出にくいことなのかもしれない。そうすると、日口対照言語学の問題と関係する）。このことは、佐久間（1955）が「（略）中心文が、他の段や連段の中心文との間により高次元の統括機能を発揮する。」と分析しているのと同じ現象と言えるのではないだろうか。

2. アスペクト・テンスによる記述のパターン

2-1 反復されるパターンと統括の構造

a は Последний год Достоевского (ポールギン) 冒頭のアスペクトである。この a パターンは、初めに完了体連続し、次に不完了過去で、作者による現代からの視点・解説機能を果たし部分的統括をしている(不完了体現在 пишет も含み統括)。a のパターン(別種のパターンも存在する)の反復現象が、本全体 b. において広域、に見られる。こうしたパターンが段を形成し、文脈展開するにつれて文脈をまとめ、相対的に、より大きい統括力をもつ段となることもある(参照: 2-2-2)。

- a 段のはじめ p. 6 完了体過去 заехал, завез; 不完了体現在 пишет
段のおわり p. 6 不完了体過去 оставалось 作者の評価。部分統括している。
- b
- | | |
|------------|---|
| テキスト全体のはじめ | p. 6 заехал, завез 完了過去で過去の出来事を臨場感・劇場型の効果で描く→これを不完了 оставалось で現代視点から過去の出来事を見ながら、作者の視点解説機能。 |
| テキスト全体のなか | 不完了現在 = 歴史的現在 = 事実 や 完了連続、など多様。 |
| テキスト全体のおわり | p. 634 - 637 完了の連続→不完了体過去の連続... = 現代の視点から過去を見る。具体的事態に縛られていない、より一般的レベル・描象的な表現にまで引上げられている作者の視点・テキスト全体の統括。 |

この p. 6 の「段」が「ドストエフスキー最晩年についての話題提示(死ぬ1ヶ月前の時期から記述開始)」となって、以後展開部で詳細な描写があり、結尾部で「ドストエフスキー最晩年の作者の解説」という構成である。つまり、全643ページは、冒頭部 p. 6 に「ドストエフスキー最晩年の話題提示」→「話題展開」→ p. 634 - 637 結尾部で「ドストエフスキー最晩年についての作者による統括」である、と理解される。この過程の中に、無数の文脈とそれを各文脈で「まとめる中心文で段を形成し」、大中小の「段」を形成しつつ、小の「段」は、より大きい規模の話題を表す・より抽象度・高次元の表現をもつ作者のモダリティが前面に出ている主観的見解の「段」に吸収されながら、連段形成し、最後に大段である「ドストエフスキー最晩年についての作者の見解」p. 634 - 637 に「統括」される、のではないだろうか。佐久間(1995・2003)を基に、「ロシア語テキストにおいて提題表現と何らかの叙述表現が骨格として広域に対応関係をなして大きな統括力の中心文をつくり、より小さいサイズの中心文が各部分で形式段落を超えて小さい意味のかたまりを統括している、のではないか」(櫻尾2000)と仮説を述べたが、小論でもある程度そのことが言えるのではないかとと思われる。

2 - 2 結尾部における全体的統括例（Последний год Достоевскогоの場合）

2 - 2 - 1 作者はおわり近くに（p.632～633）ドストエフスキーの最晩年と重なり合った当時のロシア思潮の変化結果を、完了体で連続し、時代状況の変化とドストエフスキーの内奥のぶつかり合いを書いている。 - 1 - で触れたが、К 1881 году обнаруживаются（p.634）で統括される段は完了体が文章展開機能を担っている（混在する不完了体は完了体に対する背景説明や補足機能である）。вызвано, не шлохнулось, оставили, обратившееся, вставшее, столкнулись, заколебалась, внес, дрогнувшие, призвана, восстановить, исчерпалаなどの完了体（分詞含む）が見られる。完了連続（完了体の連弾は読み手にダイナミックな時代変化の息づかいを感じさせるだけではなく、読み手を空間的にその場面に誘う機能をもっている）によって、今ここにドストエフスキーがいるという臨場感の場面挿入後、後続でp.636 секрет Достоевского и заключался, не рекомендовал, начинал, говорил, полагал, намекал, призывал, указывал, служилаにおいて作者が、ドストエフスキーの最晩年を不完了過去の連続によって現代から過去を見ている、そこから先行記述との配列・相関関係の結果、先行記述とは異なる、落ち着いた文体が生じていると、解釈される。本を閉じる前の読者にも、完了体の連続の動的文体・臨場感の創出・劇場型では感じられない、静的な、棺を閉じて全ての業績が額に収まっている中で、そこから現代人が現代の時点で、テキストの基本時点＝現在から、まるで過去の資料を見るように見ている文体が感得できる。不完了過去の連続が常にそのような文体を作るのではない。最晩年に関して、冒頭部p.6では不完了現在形を多用し、結尾p.636では不完了過去形を多用している。p.6とp.636は視点移動の点で広域対応関係にある（ - 2 - 2 - 2）。p.6の不完了現在や完了未来形の連続（умирает, уходит, стоит, будет оборвано, сделаются）はテキスト基本時点＝現在（мы-то знаем）と同レベルでドストエフスキーを見ている。

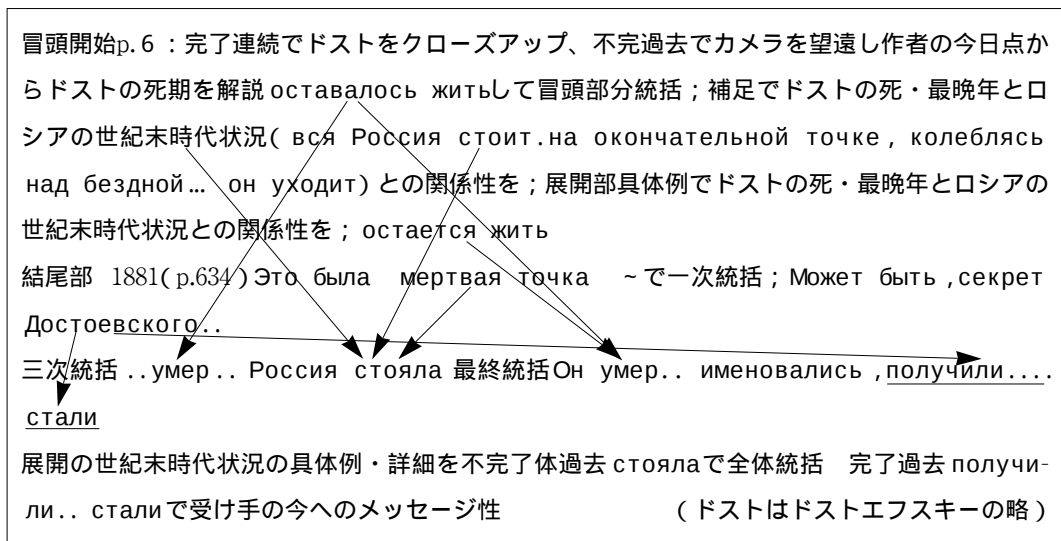
上記はアスペクト基本機能も生きている。ただし、問題は、完了体連続の（段落連続）の後に、一転して、不完了体過去の連続の現象において、佐久間（2003）の言う「段」と「段」との間の相関関係・相対化から生じる効果が存在するのではないかと考えられることである。不完了体過去は、基本的にはプロセス描写やテキスト現在との隔絶性 *разобщенность*→結果の無効性描写（*аннулированность*）、反復でない限り、「過去の事実」を示す。過去の事実の列挙は一見して平淡な描写である。なぜなら不完了体は変化そのものを表すことを本質としていない。この技法がこの大著（全654ページ）の終わり部分（636～638）に現れている。この不完了体の反復は、単調な技法になりかねない。しかし、おわりにおいて、明らかに読み手が書き手の最終的まとめ・作者の見解解説を期待している箇所において、完了体連弾後の、不完了体過去の連続配列は、現代から見ればすでに一般的評価の定まった歴史的事実という“静”となって固定化している過去の歴史的事実を描写する技法である。作者はあえてその過去の事実についての一般的な見方を述べる技法を借りて、自分個人の考え方を示す効果を与えている。それは、作者が呼吸を整えて、ドストエフスキーの最晩年を、遠近の、遠から落ち着いて見、自己の解釈を書いている、という機能をテキストに与

えているものと思われる。動と静、変化と不変性の組み合わせである。完了体の連続による新たな出現機能、変化結果を示す機能（＝完了体過去形は基本的に、新たな変化の結果が今、ここに、眼前にある、ことを伝えることを本質としている）の文脈においてドストエフスキーが最晩年に思潮動乱の新状況にあったことを読み手に積み掛けるように伝えている。変化と不変化との対比の時にこの完了体の連続と不完了の連続の組み合わせタイプがしばしば用いられるが、この配列を本の終わりで用いることで、作者の考えが、より普遍性を持つ考え方、真理であるという効果をもたらしている。もしこれを冒頭部（p. 6）にあるように、不完了の現在形の連続で歴史的現在形にしていたら、これほどの落ち着いた論調は出てこなかったのではないか。不完了過去形の中に少数の歴史的現在形が配列されるならば現在形効果は少ないが、歴史的な事実であっても不完了体の歴史的現在形の連続にすると、現在形の持っている性質がどうしても払拭できない。そのため、遠近の遠の効果が薄れる。作者が完了の連弾から不完了体の歴史的現在形を飛び越して一気に不完了過去形連続へとジャンプしたことで、19世紀末ドストエフスキー同時代の場面から現代へと場面・視点が移り、19世紀末が過去へと移動したことを強く読み手は感じる。作者が大きく前景化し、19世紀のドストエフスキーの置かれた状況が後景化する。これらの効果は作品全体の中で出てくる。不完了過去形の集積、で言われていることが、すでに本の終わり部分であるため、作者の解説を期待し始めている読み手には作者の視点・解説と認識できるだけではなく、重層的視点提示が、どの時間に軸を置いての解説かを示し、奥行きある文体を作り出している。

2 - 2 - 2 基本機能としての完了体過去の結果残存機能と、テキスト機能

テキスト結尾部の最後（ポールギンP.643）では、Он умер完了過去 Россия стояла不完了過去・先行文に対する時代状況・背景… Будущее было不完了過去・先行文に対する時代状況・背景現代から過去をみる視点 Он умер完了過去 вопросы … получили 完了過去・現代にも継続している効果、они стали 完了過去・現代にも継続している効果。（資料8）になっている。- 2 - 2 - 1の不完了過去連続による段統括と異なり、この段における完了体過去の結果残存機能（基本的機能）は読み手へのメッセージ性（このケースでは完了体過去のテキスト機能）がある。完了体についてすでに、“動的文体・臨場感の創出・劇場型、新たな出現機能、変化結果を示す機能、ダイナミックな息づかい、積み掛けるように伝え”、等の効果・機能を述べたが、この - 2 - 2 - 2の完了過去は、テキスト全体の締め括りの位置—読者にとってテキスト（本）を閉じる最終ページの最終段にある—関係が重要である。完了過去がすなわちメッセージ性ではなく、テキスト内の相関関係から出てくる、と思われる。位置（Inderjeet Mani / 奥村学他2003^{注10}）についても、テキストの最終位置が常に一定の意味を示すのではない。ドストエフスキー最晩年1881年の時代状況の変化と彼の内奥のぶつかり合い・死の関係を完了体の文脈展開機能で描き、次にドストエフスキーの意味を不完了体過去において、作者の今日視点で解説したあと、最終位置で完了体過去を置いた等、相関関係に意味がある、と考えられる。この段がテキスト（本）全体をメッセージ性で統括していると考えられる。動詞の語彙の意味、完了過去の結果残存＝現在との関係性、умер（一定の状況においての死）+ стояла ,

было(= 不完了体過去の разообщенность 現代とは切り離された完全な過去の情況・作家が死んだ時のロシアの情況), умер(一定の情況においての死→現在にも関係性をもつ) + именовались(= 不完了体過去の разообщенность 現代とは切り離された完全な過去の情況・作家が死んだ時のロシアの情況) + получили, стали(ドストエフスキーの問題として今日性を帯び始めた、というメッセージ機能)により、作者の今日視点の解説は読み手の今日に向かったのメッセージ性機能がクローズアップされているという関係性が重要なのではないか。冒頭・展開・結尾に節や語彙レベルの対応関係があり、本全体を有機的に結合している（これ以外の箇所でも対応関係が見られる）。



こうしたアスペクト・テンス形態の配列は、空間・場面移動だけではなく、時間移動であり、動から静への急激な移動、人物ドストエフスキーから作者本人への前景後景化など、幾層もの機能変化を経ている。これが本の内容とは別に読む者に奥行きを感じさせる。過去の事実を不完了現在形の歴史的現在で表した場合と不完了体過去形連続では、文脈によっては差が出る。別の効果になる。磯谷（1977）は、Рассудова О. (1968) の定義を解説して「... 不完了体は、完成、未完成とは無関係に動作の事実を確認する、ということに加えて、それが名指す動作と発話時点との間に隔絶性、断絶をもうけようとするものである。(略)」と定義している。不完了過去の“隔絶性、断絶”という基本機能はテキスト機能でも生きている。問題は、こうした“隔絶性、断絶”という不完了体基本機能が、テキストでは配列・出来場所・相関、対応、相対関係による機能変化をもたらす、という分析観点が有効ではないだろうか、ということである。こうした重層的効果なしにテキストが読み手・受け手を引っぱっていくことはできないのではないか、と思われる。

おわりに

「文学は、ひとりの読み手がそれを読んで、ある内的体験を得、その作品がそれを通して自分にかかわってくることを意識した時、はじめてそこに存在する。一口で言えば、文学は読み手の感動において、成立する」(柴田翔1968「研究と感動」)のであれば、作者もまた受け手の感動へ向けてあらゆる手段—アスペクト・テンス形態の選択を含め—を駆使するであろう。作者は否応なく(無意識もあるにせよ)アスペクト・テンス形態の効果的選択を迫られる。外国人受け手はその作品が自分に関わってくることを認識する上でテキストにおけるアスペクト形態の配列は無視できない。テキスト全体における冒頭・展開・結尾に出現しているアスペクト形態の配列による相関関係の効果・機能は、連文だけのアスペクト分析ではまかないきれない。テキスト機能という観点からの分析が有効ではないか。なぜなら、この相関関係効果は、樫尾(2003)で見たように、作者のモダリティ(主観的判断評価)さえ醸し出すことが少なくないからである。アスペクト基本機能はこうしたテキストでも基本的には生きている。基本機能を生かしつつテキスト機能を付加したアスペクト・テンス論の再構築は、テキストに接しそれに感動する面でも、無駄ではないと思われる。

「あらゆる文学研究の究極の目的は、文学が感動を通して自分にかかわってしまっているというのは、いったいどういう事態なのかを、さまざまな手段を用いて、解明することである」(柴田翔「研究と感動」)という指摘に沿うならば、内容やプロット、論理の一貫性(コヒアランス)以外にも、ロシア語テキストに感動するという事態を、あらゆる手段を用いて解明する際に、そのあらゆる手段の中に、アスペクト形態配列・相関関係・相対化の分析も欠かせないのではないか。これはアスペクトの先駆的研究者のひとりである磯谷(1977)の次の指摘にも表れている「.(略)問題は、ロシア人が完了体、不完了体を使い分けるときに行う微妙な状況把握が外国人にはよく分からないところにある」。これ以来、四半世紀を経ているのでこの指摘は取り消されているとは思うが、多くの外国人にとってはまだ状況は変わっていないのではないか。磯谷(1977)の指摘する“微妙な状況把握”から来るアスペクト現象の難解さは、今後、テキスト全体、さまざまなサイズの「段統括」(佐久間2000)の中でアスペクト・テンス機能を見ていくことで、“微妙な状況把握”の分からなさ→より客観的なアスペクト・テンス機能の解釈が得られると思われる。作田、竹内がテキスト理解や文学感動に関して語っているところによれば、テキストは、書き手・送り手の「経験」がテキストに再現されているだけでなく、他者によるテキストの中に読み手・受け手は「みずからのなんらかの経験」(作田1968、竹内1967)が再現されていることを感じとり、テキストを通じて書き手・送り手/読み手・受け手相互間に「経験の共同体」が成立(作田1968、竹内1967)するからである、と規定されている。竹内(1967)は、「作家と読者の統合意識」が一致する条件は、「わたしたちに普遍的な心の傾向から、求めることができる。」としている。この「普遍的な心」(竹内)「経験の共同体」(作田)はアスペクトの客観的な機能分析にも必要である。そのための具体的方法論は、

榎尾（1998・2000・2003）でも若干検討したが、佐久間の「段統括機能論」が有効であると考えられる。個々のアスペクトだけではなくより大きい環境や段落を超えたまとまり（佐久間2000他多数）に置くことで、より客観的なアスペクト・テンス機能が浮き彫りになると思われる。今後の課題は、アスペクト形態配列・相関関係がなぜ感動を与えるのか、筆者は、この効果に一種の“構造”があるのではないかと推測しているが、アスペクト・テンス分析は、個人の研究でできるものではない。広く協同研究・相互批判等が行われることを期待したい。

（かしお しょうこ・本学非常勤講師）

【注】

注1 基本文法：磯谷 1977；佐藤 1982；原 1996；三谷 2001；城田 1993・2003；榎尾 1998・2000・2003；Рассудова1968；Русская Грамматика , ;Бондарко и др.2001；Белошапкова 1999他。

注2 ロシアでは、ロシア語テキストにおけるアスペクト（別名「体」とも言う）が外国人にとって難しいことが長い間気づかれてこなかった。アスペクトはロシア語母語者にとって無意識に近い用法である。ロシア語母語話者である教授陣が「外国語としてのロシア語」をロシアで広く教授する過程を経て、相当のロシア語知識がある留学生・研究者・大学教員がおしなべてアスペクト用法が容易ではない事実は何年にもわたってぶつかる中で、しかもどうしてここで完了体を使うのか、不完了体なのかを外国人に理解させるのはロシア語母語者教授陣にとって至難の技であることがようやく気づかれて（1950 - 1960年代はじめ）本格的に組織的な外国人のためのアスペクト教授法が開発されていった（その代表的所産がРассудова О.1968.である）。小論筆者が1971年に留学（ブーシキン大学）したときも上記の“遅い気づき”を教授陣から直接聞かされ、また、Рассудоваの講演（1972年）を聴講したときもそのことについて触れられていた。なお、Рассудоваの理論および、その系統のアカデミー文法の文法書にある規定はその後継承され、1977年に筆者が留学（モスクワ大学）したときに配付された教材・シラバスもРассудова理論に基づいたものであった。現在の日本において出版されている参考書・教科書でも基本的にはРассудоваおよびアカデミー文法書が定めた基本機能の枠で説明されることが定着している。つまり、この基本機能はテキスト機能という観点からの定義ではない。

注3 磯谷 1977は、外国人としてのアスペクトの使い方の困難さの一例として、「....問題は、ロシア人が完了体、不完了体を使い分けるときに行う微妙な状況把握が外国人にはよく分からないところにある。」と指摘している。

注4 北岡誠司 1998『バフチン ―対話とカーニヴァル』講談社
木下豊房 2002『ドストエフスキー その対話的世界』成文社

注5 佐久間 1995では「(略)段の基本構造は、同じ話題を表す意味的なまとまりとして(略)統括する点にあるといえよう。」と規定し、段の「中心文が、他の段や連段の中心文との間により高次元の統括機能を発揮する。」とし、「部分的統括と全体統括の観点も必要」とされる。佐久間2000では、「『段』は、伝達内容としての『話題』を『統括』する機能を有し、「文章・談話の直接成分としての『段』という言語単位の本質が『統括機能』にあるとすると、その基本的な構成要素は、『提題表現』と『叙述表現』の組み合わせを基本とする『情報単位』だということになる。」と、規定している。

注6 例えば、ロシアのビールのTVCM（2004年ロシアTV放映）に次のようなものがある。兵隊達が整列し終わったところに、一人遅れて来た。（上官がどなる）Где ты был?どこに行っていた?（兵士が答える）Пиво пилビールを飲んでいました。不完了体過去形пилはзанятость（忙しさ・用事）という基本文法機能が使われている。この場面（これもテキストである）はCM作者の解説は顕在的に出ていない。登場人物と出来事だけでCMを構成している（CM作者の意図・軍隊整列に遅れさせるほどわが社のビールはうまい-は、結果として、潜在的には存在するが）。こうしたテキストは広く（文学作品などに）見られ、アスペクト基本機能が効果的に生きている。この種のテキストでは基本機能でまかなえる。もちろん、作者がその場面を切り取ったからには、作者の視点解説は含まれる。だが、作者の視点解説は潜在的であり、主要目的は、受け手に出来事や登場人物を介して作者の意図を達成する

手法である。なお、このCMのアスペクト現象は出来事そのものは順次性だが、その部分—上官が聞いた—すると兵士は答えた—の完了連続は隠れ、不完了過去の連続だけである。学習参考書では、不完了過去の連続は同時性の“しながら…ていた”や並列的な描写が典型とされるが、現実テキストでは、上官が聞いた完了—すると兵士は答えた完了の「順次生」部分が潜在化している現象例があることになる。

注7 この本（小論内で、本題の引用の際、ボールギン、としている場合もある）は、当時の公資料などから事実証明を試みているが、作者は“ドキュメント”とせずに、“роман小説”としている。小論筆者は、テキスト全体におけるアスペクト分析の必要性を痛感しているが、小論では残念ながら資料中、断片のみしか載せていない。なお、作者ボールギン氏はロシアのドストエフスキー学会会長である。

注8 作品成立時（1899年）チェーホフは持病の結核で生命の限界を感じていた（1904年没）。作家三木卓（2004年9月NHK「ラジオ深夜便」）は、死と対峙して、「神仏を信じる人間にはなれなかった。しかし、無駄ということは考えたくない。…永続してあるものなんてのに、関心があるわけですよ。おれは死ぬかもしれないが、この富士はまだもつな、と。もつというのは頼もしいんですよ。おれがいなくなっても人類はもってほしい。おれはバラバラになっても、地球があれば、河の中をおれの分子のひとつぐらいいは流れているかもしれない。」と感じたことを述べている。死と対峙した人間が、自分の死後も自然は永遠ということに満足している点で、この東西作家は共通している（チェーホフも無神論者だった）。

注9 社会学者宮台真治は、自身が学生時代に国語力がトップだったことを回顧した後、「どうしたら国語力がつか」、の質問に答えて、「パターン認識と要約力」と即答している（2004年9月TBSラジオ「荒川強啓デキキャッチ」）。

注10 機械自動要約分野でも「一般に、位置と手がかり句の素性が抽出タスクでもっとも有効ようだ。」との指摘がある。

【参考文献】

- 磯谷孝 1977『演習ロシア語動詞の体』、吾妻書房
- 糸川絢一 2004「ドストエフスキーの大地と大地主義」新潟産業大学人文学部紀要 第16号
- 桎尾領子 1998「ロシア語テキストにおけるアスペクト機能」『高崎経済大学論集第41巻第1号』、2000「ロシア語アスペクトのテキスト機能」同『第42巻第4号』、2003「ロシア語テキストにおける動詞のモダリティ機能」同『第45巻第4号』
- 北岡誠司 1998『パフチン —対話とカーニヴァル』講談社
- 木下豊房 2002『ドストエフスキー その対話的世界』成文社
- 作田啓一 1968「文学的感動の図式」『文学のすすめ』高橋和巳編 筑摩書房
- 佐久間まゆみ 1987b「『文段』認定の一基準（1）- 提題表現の統括 -」『文藝言語研究言語編』11 筑波大学文芸言語学
- 佐久間まゆみ 1995「中心文の『段』統括機能」『日本女子大学文学部紀要』44
- 佐久間まゆみ 1999「現代日本語の文章構造類型」『日本女子大学文学部紀要』48 日本女子大学文学部
- 佐久間まゆみ（研究代表）2000『日本語の文章・談話における「段」の構造と機能』科学研究補助金研究成果報告書
- 佐久間まゆみ 2002「接続詞・指示詞と文連鎖」『複文と談話』日本語の文法4.【仁田義雄・益岡隆志編集】岩波書店
- 佐久間まゆみ 2003「文章・談話における『段』の統括機能」『北原保雄監修、佐久間まゆみ編 朝倉日本語講座7』朝倉書店
- 佐藤純一 1982「ロシア語」、『講座日本語—外国語との対照—』、明治書院
- 柴田翔 1968「研究と感動」『文学のすすめ』高橋和巳編 筑摩書房
- 清水正 2004『チェーホフを読み』鳥影社
- 城田俊 1993『現代ロシア語文法』東洋書店；城田俊2003『現代ロシア語文法 中・上級編』東洋書店
- 竹内成明 1967「文学の言語」桑原武夫編『文学理論の研究』岩波書店
- 松下裕 1997『チェーホフの光と影』筑摩書房
- 原求作 1996『ロシア語の体の用法』、水声社

Inderjeet Mani 著 / 奥村学・難波英嗣・植田禎子訳 2003 『自動要約』 共立出版

Русская Грамматика , (アカデミヤ文法82) 1982 Академия наук СССР/ Институт русского языка;

Бондарко А.В. Булыгина Т.В. и др. 2001 Теория функциональной грамматики . УРСС; Под редакцией Белошапковой

В.А. 1999 Современный русский язык . Азбуковник; Подучева Е.В. 1996 Семантические исследования Семантика времени и вида в русском языке Семантика нарратива . школа языки русской культуры ; Шанский Н. 1988 Современный русский литературный язык Просвещение ; Рассудова 1968 Употребление видов глагола в русском языке . МГУ ;

【資料出典】

И.Волгин 1990 Последний год Достоевского Москва Известия; А.П.Чехов Полное собрание сочинений и писем в тридцати томах Москва, Издательство Наука - Дама с собачкой(1986), Скучная история(1985)

【資料】

- 1 Он об этом не знал. Но мы-то знаем.
- 2 В один из последних дней 1880 года Достоевский заехал к своему старинному другу Алексею Николаевичу Плещееву: завел долг двадцатилетней давности. «Вот еще 150 р., — пишет он в адресованной поэту записке, — все-таки за мной остается хвостик. Но отдам как-нибудь в ближайшем будущем, когда разбогатею. А теперь еще пока только леплюсь. Все только еще начинается». Ему оставалось жить чуть больше месяца. Пушкин незадолго до своей гибели пишет «Памятник»;

«На следующее утро, — пишет Любовь Федоровна, — он проснулся бодрый и здоровый».

Появилась надежда: кровотечение не повторялось. Большой несколько повеселел; позвал детей, немного с ними поговорил. Днем зашел метранпаж — потолковать о печатающемся «Дневнике». «Ну, что скажете,

«Ему предписали полное спокойствие, которое необходимо в подобных случаях, — пишет Суворин. — Но по натуре своей он не был способен к покою и голова постоянно работала. То он ждал смерти, быстрой и близкой, делает распоряжения, беспокоится о судьбе семьи, то живет, мыслит, мечтает о будущих работах, говорит о том, как вырастут дети, как он их воспитает...»

В другой своей статье Суворин рисует схожую картину: «Весь день был весел и спокоен, шутил, говорил о будущих своих работах, говорил о своих детях, успокаивал окружающих. «Чего вы меня отпугаете? Я еще вас переживу».

Ему остается жить сутки.

- 3 «Новое время» писало 31 января: «Утром, в день смерти... ему принесли сверстанный последний лист этого номера, уже прочитанный им в корректуре: требовалась только подпись его для печати. Он не мог этого сделать. Жена его сказала посланному: «приходите завтра — ему будет лучше и он подпишет». Завтра Ф. М. лежал уже на столе».

4 В Ореанде сидели на скамье, недалеко от церкви, смотрели вниз на море и молчали. Ялта была едва видна сквозь утренний туман, на вершинах гор неподвижно стояли белые облака. Листья не шевелились на деревьях, кричали цикады, и однообразный, глухой шум моря, доносившийся снизу, говорил о покое, о вечном сне, какой ожидает нас. Так шумело внизу, когда еще тут не было ни Ялты, ни Ореанды, теперь шумит и будет шуметь так же равнодушно и глухо, когда нас не будет. И в этом постоянстве, в полном равнодушии к жизни и смерти каждого из нас кроется, быть может, залог нашего вечного спасения, непрерывного движения жизни на земле, непрерывного совершенства. Сидя рядом с молодой женщиной, которая на рассвете казалась такой красивой, успокоенный и очарованный в виду этой сказочной обстановки — моря, гор, облаков, широкого неба, Гуров думал о том, как, в сущности, если вдуматься, всё прекрасно на этом свете, всё, кроме того, что мы сами мыслим и делаем, когда забываем о высших целях бытия, о своем человеческом достоинстве.

Подосел какой-то человек — должно быть, сторож, —

段 В подурнул. Плечи, на которых лежали его руки, были теплы и вздрагивали. Он почувствовал сострадание к этой жизни, еще такой теплой и красивой, но, вероятно, уже близкой к тому, чтобы начать блекнуть и вянуть, как его жизнь.

- 5 Теперь задумаемся вопросом: мог ли майор Кузьмин со своими спутниками зайти к Достоевским (чтобы, скажем, распросить о личности соседа)? Это не исключено. Достоевский мог и сам выйти из квартиры, привлеченный шумом и шагами на лестнице.

Баранников чувствовал себя очень уверенно на Кузнецком. Лицо, часто посещавшее Баранникова (о нем — речь впереди), говорит в своих показаниях: «Особенной озабоченности, тревоги или поспешности я в Алафузове не замечал: заставлял его лежать на кровати или диване за чтением Лермонтова, которым он особенно восхищался...»

«Но Лермонтов мне, говоря серьезно, очень, очень нравится, — пишет Баранников из тюрьмы, — его «Демона» я знаю почти всего наизусть. Не кончи он так рано, в 26 лет, из него вышел бы не только великий поэт, но и великий гражданин. В моих глазах он стоит неизмеримо выше Пушкина».

Темы для разговоров с соседом были: неясно только — были ли сами разговоры.

В своих тюремных посланиях Баранников ни разу не упоминает имя Достоевского. Казалось бы, это обстоятельство как нельзя лучше свидетельствует в пользу того, что этот сюжет нимало его не интересует.

Но отсюда можно сделать и совершенно обратный вывод. Ибо упоминание Достоевского — факт поразительный и, на первый взгляд, необъяснимый.

Действительно: за срок более года, в ожидании суда Баранников написал из Петропавловской крепости и Дома предварительного заключения несколько десятков писем — и ни в одном из них нет и намека на Достоевского. Положим, письма дошли до нас не все и не полностью; положим, в некоторых из них есть вымарки, сделанные тюремной цензурой, — все равно такое молчание выглядит странным.

Действительно: за срок более года, в ожидании суда Баранников написал из Петропавловской крепости и Дома предварительного заключения несколько десятков писем — и ни в одном из них нет и намека на Достоевского. Положим, письма дошли до нас не все и не полностью; положим, в некоторых из них есть вымарки, сделанные тюремной цензурой, — все равно такое молчание выглядит странным.

И, наконец, лагерь русской революции.

К 1881 году здесь обнаруживаются признаки глубокого разброда. Это вызвано не только исчезновением с исторической сцены признанных лидеров движения, но и тем обстоятельством, что после реформы 1861 года — освобождения крестьян — крестьянская антифеодальная революция делалась все более проблематичной. Крестьянство не шелохнулось во время великого «хождения в народ» 1874 года: бесчисленные жертвы, принесенные молодыми интеллигентами ради абстрактного «мужика», реального мужика оставили вполне равнодушным. Народолюбие, обратившееся, так сказать, в официальную принадлежность русской демократии, подвергалось тяжкому испытанию. Крестьянство, все глубже вставшее в новый общественный уклад, не спешило обнаруживать своих антибуржуазных потенций. В 70-е годы народники столкнулись с неким социальным вакуумом, когда «мужик» уже не оправдывал возлагаемых на него революционных надежд, а иной силы, способной «раскачать» самодержавие, еще не существовало.

Русские радикалы делают последний отчаянный шаг: они вступают в бой с правительством один на один.

Результаты этого единоборства были налицо: ошеломленная власть впервые заколебалась. Народовольческий террор внес глубокое смещение в ее дрогнувшие ряды. «Диктатура сердца» призвана была восстановить пошатнувшееся равновесие. У правительства еще оставались громадные материальные резервы: армия, полиция, аппарат государственной власти. В то же время «Народная воля» почти исчерпала свои ресурсы. Загадочная «стихия» никак не отзывалась на ее великие усилия и жертвы.

Теоретически можно представить, что Исполнительный комитет в конце концов мог бы свалить правительство. Труднее вообразить, кто и каким именно образом воспользовался бы плодами этой победы.

6 То, что произойдет через месяц после кончины Достоевского — достижение революционным подпольем его главной цели, явят историческое бессилие террора. Но еще при жизни автора «Карамазовых» обнаружались вызванные этой борьбой мучительные нравственные коллизии. Террор был все тем же «механическим» разрешением общественных вопросов, раскольнической «арифметикой», хотя и благойрожденной самоактанием тех, кто поднимал «топор». Ибо вопрос о «слезнике ребенка» и о всеобщем счастье был поставлен задолго до того, как бомба, разорвавшаяся на Екатерининском канале и предназначенная императору, случайно покалечит оказавшегося рядом подростка. Алеша Карамзов у Илюшиного камня призывает русских мальчиков любить друг друга — и уходил во вторую часть романа, дабы покуситься на царсубийство. Интересно, явились бы при сем дети?

Русская революция замешкалась у порога: она еще не решила всех «предельных» вопросов.

Таков был многосоставный спектр 1881 года: от белого царя до «красного» террора; от философских прений о существовании божьем до взрывов народолюбческих бомб, подтверждавших и отрицавших присутствие нравственного закона одновременно. Это была «мертвая точка» века: он мог сдвинуться в ту или иную сторону.

Достоевский умер — и вдруг почудилось, что дело пошло.

7 Может быть, секрет Достоевского и заключался в том, что он не рекомендовал никаких конкретных решений. Он начинал «с другого конца»: говорил о правде, о добре, об искренности, о справедливости. Он полагал, что здоровье государства зависит от нравственного здоровья его граждан; что никакие «механические» усовершенствования не поведут к желаемой цели, если останется несовершенным сам человек. Его называли учителем: это было учительство особого рода. Он не брал на себя смелость *по пунктам* ответить на сакраментальный вопрос: «Что делать?» Скорее, он намекал на то, как делать, именно намекал, потому что в отличие, например, от Толстого у него нельзя отыскать указаний на обязательность тех или иных действий или поведенческих норм. Он доверял каждому отдельному человеку, его моральному чутью, его свободной воле и не желал насильствовать эту волю нравственной «обязаловкой», навязыванием решений, приемлемых абсолютно для всех. Он призывал поступать *по совести*, будучи глубоко убежден, что это сугубо индивидуальное «качество» в конечном счете совпадало с мироощущением нации и питается от него. Он указывал интеллигенции на «серые зоны», а от последних ожидал принятия двухвекковой «верхушечной» культуры, оплодотворенной этим спасительным союзом. Раздельное существование народа и образованного общества, чреватое взаимным набелью, он хотел восполнить их сжогением — прежде всего в нравственном плане.

То, что он говорил, не было «программой». Это походило, скорее, на чувство, но — чрезвычайно сильное, колеблющее сокровенные струны души. И если политика

8 через месяц русский император целым и невредимым выйдет из кареты, подорванной бомбой 19-летнего Рыскакова, и вступит в непродолжительную беседу с покусавшимся, после чего второй метательный снаряд, брошенный Гриневичким, прекратит его царствование; еще через месяц Кавказское медицинское общество учредит стипендию имени Достоевского за сочинение на тему: «Этиология умопомешательства в общественных и нравственных условиях русской жизни по сочинениям Ф. М. Достоевского».

Он умер в годину великих потрясений и великих надежд. Россия стояла «на какой-то окончателной точке»: чаша сесов колебалась. Будущее было открытым.

Он умер — и вопросы, которые в зависимости от нужд вопрошавших именовались то вечными, то мировыми, то проклятыми, получили еще одно обозначение: они стали называться вопросами Достоевского.

9 Носящий это имя, то есть я, изображаю из себя человека 62 лет, с лысой головой, с вставными зубами и с неизлечимым tic'ом. Насколько блестяще и красиво мое имя, настолько тускло и безобразен я сам. Голова и руки у меня трясутся от слабости; шея, как у одной тургеневской героини, похожа на ручку контрабаса, грудь впалая, спина узкая. Когда я говорю или читаю, рот у меня кривится в сторону; когда улыбаюсь — всё лицо покрывается старчески мертвенными морщинами. Ничего нет внушительного в моей жалкой фигуре; только разве когда бываю я болен tic'ом, у меня появляется какое-то особенное выражение, которое у всякого, при взгляде на меня, должно быть, вызывает суровую внушительную мысль: «По-видимому, этот человек скоро умрет».

Читаю я по-прежнему не худо; как и прежде, я могу удерживать внимание слушателей в продолжение двух часов. Моя страстность, литературность изложения и юмор делают почти незаметными недостатки моего голоса, а он у меня сух, резок и певуч, как у ханки. Пишу же я дурно. Тот кусочек моего мозга, который заведует писательской способностью, отказался служить. Память моя ослабела, в мыслях недостаточно последовательности, и, когда я излагаю их на бумаге,

Я знаю, о чем буду читать, но не знаю, как буду читать, с чего начну и чем кончу. В голове нет ни одной готовой фразы. Но стоит мне только оглядеть аудиторию (она построена у меня амфитеатром) и произнести стереотипные «в прошлой лекции мы остановились на...», как фразы длинной вереницей вылетают из моей души и — пошла писать губерния! Говорю я неуверенно быстро, страстно и, кажется, нет той силы, которая могла бы прервать течение моей речи. Чтобы читать хорошо, то есть нескучно и с пользой для слушателей, нужно, кроме таланта, иметь еще спорную и опыт, нужно обладать самым ясным представлением о своих силах, о тех, кому читаешь, и о том, что составляет предмет твоей речи. Кроме того, надо быть человеком себе на уме, следить зорко и ни на одну секунду не терять поля зрения.

мыслей. Каждую минуту я должен иметь ловкость выхватывать из этого громадного материала самое важное и нужное и так же быстро, как течет моя речь, облекать свою мысль в такую форму, которая была бы доступна разумению гидры и возбуждала бы ее внимание, причем надо зорко следить, чтобы мысли передавались не по мере их накопления, а в известном порядке, необходимом для правильной компоновки картины, какую я хочу нарисовать. Далее я стараюсь, чтобы речь моя была литературна, определения кратки и точны, фразы возможно проста и красива. Каждую минуту я должен осаживать себя и помнить, что в моем распоряжении имеются только час и сорок минут. Одним словом, работы немало. В одно и то же время приходится изображать из себя и ученого, и педагога, и оратора, и плохое дело, если оратор победит в вас педагога и ученого, или наоборот.

моря... Я тоже смеюсь. Внимание освежилось, и я могу продолжать.

Никакой спорт, никакие развлечения и игры никогда не доставляли мне такого наслаждения, как чтение лекций. Только на лекции я мог весь отдаваться страсти и понимал, что вдохновение не выдумка поэтов, а существует на самом деле. И я думаю, Геркулес после самого пикантного из своих подвигов не чувствовал такого сладостного изнеможения, какое переживал я всякий раз после лекций.

Это было прежде. Теперь же на лекциях я испытываю одно только мучение. Не проходит и получаса, как я начинаю чувствовать непобедимую слабость в ногах и в плечах; привык; через ?